

銚子漁港は年間水揚量日本一となったが、長い目でみると、県内漁業は水産資源の減少や担い手不足・高齢化などの課題に直面している。そうした中、持続可能な漁業への転換が進められている。

県内最大の漁港であり、全国から漁船が集まる銚子漁港の25年の年間水揚量は、約22.3万トンとなり、3年ぶりに全国1位を奪還した(図表1)。12年連続首位の記録が23年に途絶え、以降は釧路漁港(北海道)にその座を譲っていたが、25年は同漁港に約10万トンの差をつけた。

今回の首位奪還の主因は、マイワシの豊漁である。マイワシは、銚子漁港の総水揚量の約8割を占め、前年比で50.8%増加した。また、近年不漁が続いていたサンマも、前年の約84倍と大幅に回復した。背景には、17年から続いていた「黒潮大蛇行」が、25年春ごろに終息に向かったことがある。銚子沖は、親潮と黒潮がぶつかる「潮目」にあたる屈指の好漁場だが、大蛇行期間中は魚群の形成が不安定であった。海流の正常化に伴い、回遊ルートが本来の状態に戻ったことが、水揚量の急増につながったと考えられる。

もっとも、長い目でみると、県全体では水産資源の減少や担い手不足・高齢化などが絡み合い、県内漁業を取り巻く環境は厳しさを増している。海面漁業生産量と海面漁業就業者数の推移をみると、ともに長期的な減少傾向にあり、23年は、93年比でそれぞれ6割、7割の大幅減となった(図表2)。銚子漁港の活況の裏で、県内漁業者の生産基盤を揺るがす課題への対応が急務となっている。

こうした課題に対し、県内では、人材確保や新たな養殖手法・デジタル技術の導入、資源の有効活用といった多様な取り組みが行われており、安定的かつ持続可能な漁業への転換が進められている(図表3)。

担い手の確保・育成では、千葉県が25年4月に設立した「千葉県海洋人材確保・育成センター」が本格稼働している。同センターでは、漁業体験から就業後の技術研修までをワンストップで支援しており、若年層の入職促進に寄与している。また、県は同年9月に、県内の水産系高校への出願条件を緩和し、通学が難しい遠隔地に住む生徒の募集を26年度から開始することも発表している。

新たな養殖モデルの構築では、水産養殖スタートアップのさかなドリーム(館山市)が25年12月に鋸南町勝山漁協と新規養殖魚の生産に関する連携協定を締結した。同社が開発した育てやすく食味に優れたハイブリッド養殖魚「夢あじ」などの生産を漁協へ委託し、量産体制を構築するとともに、最新技術の導入による地域水産業の活性化につなげる。水産資源が減少する中、「獲る漁業」から「育てる漁業」へのシフトによる、漁業所得の安定化モデルとして注目されている。

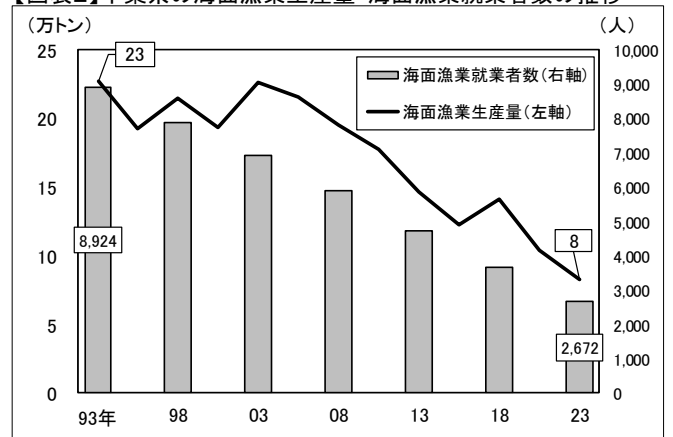
25年の銚子漁港による水揚量の日本一奪還は、千葉県の漁業が持つ潜在能力を改めて示した。もっとも、県内漁業を取り巻く構造的な課題は依然として厳しい。豊かな海がもたらす恩恵を最大限に活用しながら、持続可能で安定した漁業への転換が加速することが期待される。(竹津)

【図表1】全国主要魚港の水揚量

順位	漁港名	水揚量(トン)	増減率(%)	前年順位
1位	銚子	223,374	52.4	2位
2位	釧路	128,768	▲25.9	1位
3位	境港	125,774	0.1	3位
4位	焼津	114,302	▲8.7	4位
5位	長崎	109,133	▲8.1	5位

(出所) 日刊水産経済新聞(2026.1.7)掲載記事よりちばぎん総研が作成

【図表2】千葉県の海面漁業生産量・海面漁業就業者数の推移



(出所) 千葉県「数字でみるちばの水産」よりちばぎん総研が作成

【図表3】官民による持続可能な漁業への転換に向けた取り組み

主体	種類	取組内容
千葉県	担い手確保・育成	県漁業協同組合連合会らと連携し、相談・支援の総合窓口となる千葉県海洋人材確保・育成センターを設置
さかなドリーム(館山市)	新たな養殖モデルの構築	鋸南町勝山漁業協同組合と新規養殖魚の生産に関する連携協定を締結
SOTOBOSUMI(いすみ市)	スマート水産業の推進	魚類の水温・塩分濃度を見える化するデジタル技術の導入によって、魚価向上に貢献
海光物産(船橋市)	低利用魚の活用	処理に手間がかかるため「低利用」となっているコンロ(ニシン科)を活用して、加工食品として販売

(出所) 各種資料をもとにちばぎん総研が作成

¹ アジ科の希少魚「カイワリ」と南房総産の「金アジ(マアジ)」を掛け合わせた世界初の養殖魚